

ドル/円相場のトレード戦略

【ドル/円 週足】



■中期展望

昨年 2018 年のドル/円相場は、当初想定していたように 2017 年と同様のレンジ相場が継続しました。

年間の値幅は 10 円を下回り過去最少、2017～2018 年の 2 年間を通して値幅は 14 円に満たず過去最少となり、市場のボラティリティから収益を得ようとするディーラーにとっては極めて厳しい環境となりました。

その大きな要因としては、絶好調だった米国の経済状況にもかかわらず、年初に米国の政策への不透明感からドルが下落したこと、そして年末には米金利のフラットカーブ化やそれに伴う米国株式の大幅下落、米中貿易摩擦の激化などのリスク要因が相次いだことでドルの上値が抑えられたことが挙げられるでしょう。

米国経済が強調であり利上げ予測が続くためにドルロング・ポジションが蓄積される中でもドルが大きく上昇しないという現象は、ドル高派にとって想定しにくい状況であったと思われます。

そのため、本年年明けの 1 月 3 日に 108 円を割り込むと損切りのドル売りを巻き込みながら、ドル短期に 4 円以上の下落という動きが引き起こされました。

その後、1 月の米 FOMC では声明文から追加利上げのバイアスが削除され利上げ継続という政策スタンスが大きく変わったことによりドルは持ち直しました。

また、米経済指標は好調を維持するものも多く、良好なファンダメンタルズのなか金利が低位安定

ドル/円相場のトレード戦略

するという適温相場が再び始まったとの期待が強まっています。

ただし、米中通商交渉が難航し、米国が対中関税引き上げを実施、中国側も報復措置に出る可能性が高いことがドルの上値を抑える動きが続きそうです。

米中貿易摩擦の深刻化を考えた場合、やや下値リスクが高いと思われ、当面は107円から112円程度のレンジが想定されます。

■短期展望

先週は、米国の対中制裁関税第3弾の税率引き上げを受けてリスク回避的な動きで始まり、週初13日には週間安値109円02銭と2月1日以来の安値を記録しました。

しかし、その後は反発に転じ、週末17日には110円台を回復する動きとなりました。

米中貿易摩擦激化への懸念が根強く、ドルの上値を抑えているものの、米国のファンダメンタルズは良好でドルを売り込んでいくのも難しい状況となっています。

米中摩擦を巡っては、6月28～29日の米中首脳会談まで様子見姿勢が強まるとの見方から、今週はややリスク回避の動きが和らぎドルは底堅く推移しそうですが、上値も限りがあるでしょう。

今週のレンジは109円半ばから111円程度の動きを予想します。